

〔巻頭言〕

学会発足からの30年—そして学会の将来を思う—

元石川県立看護大学 学長

石垣 和子

2024年6月に発行された日本家族看護学会の30周年記念誌は、筆者の手元で目立つところに並んでいる。地味な色の背表紙ばかりの中で、目を引くピンク色の表紙がひときわ目立っている。本学会の発足当初に、たまたま下働きに加わり先輩たちのしんがりに居た筆者として、この冊子は、家族看護のグラウンドデザインの発表に至る今日までのすばらしい歩みが一瞥でき、感無量の思いである。

振り返ると日本家族看護学会は当時としてはやや派手な出発のしかたで始まったと言えるのではないか。家族看護の概念が浸透されていないのに学会設立は冒険だ、などというネガティブな声も聞こえたが、新設されたばかりの東京大学家族看護学教室を任せ、熱意あふれるリーダーであった今は亡き杉下知子教授（2007.03.29没）は、学会として出発することに価値を置き、全国を回り、賛同者を集めて学会を発足させた。さらに独自路線の一つとして看護だからと線を引かず、学際的な組織体制を敷き広い見地から家族看護学を組み立てようと試みた。また、当初から海外に注目し、海外との交流機会を設けることに心血を注ぎ、家族看護に関する国境を越えた展望をもたらし、会員の関心を惹きつけるとともに会員の視野を拡大した。

日本家族看護学会はこのように当初は粗削りともいえる出発をしたが、やがて将来構想委員会を設けるなどして役員間、さらには会員間の考えを交換し合い、家族看護理論だけでなく、実践活動、教育活動、研究活動に亘る活動の内実を充実させ、誰にとっても居場所がある学会となって今日に至っている。

そして現在進行形で活気が増していると感じられることは頼もしい限りである。筆者は発足当時を経験した者として、学会として発足し全国に発信できてよかった、数々の挑戦も積極的にトライして得るものがあつた、その土台を基に看護学の学会としての内実が整ったこともよかったという思いである。折々にたくさんの先人や仲間の活躍があつたことも懐かしく思い出される。一言追加すれば、海外との交流は、今日、世界の側からの日本の家族看護への関心も高くなり、パイプが太くなり日本の存在感が増している。

さて、これからの日本は人口減少と少子高齢化が進み、医療・介護や経済への影響が懸念され、ひいては家族看護にも少なからぬ手ごたえの変化があるのではないだろうか。近年、歴史学者の磯田道史氏とフランスの家族人類学者エマニュエル・トッド氏（家族システムの起源、藤原書店、2016の著者）との対談でも、日本の家族システムの特徴は少子高齢化のような社会の変化に良くも悪くも影響されると議論されている¹⁾。家族看護は個別事例をよく知り先入観を排して理解することが出発点ではないかと考えると、きっと実践、教育、研究の3側面すべてからの本学会の果たせる役割があり、現在の学会の潜在エネルギーの高さからすると将来に向けた期待が大きく膨らむ。

1) エマニュエル・トッド：老人支配国家 日本の危機、205-227、文春新書、東京、2021